

編集委員今年の抱負 2013

松尾 豊
(東京大学)

あけましておめでとうございます。本年も人工知能学会をよろしく願いたします。

2年に一度の恒例になっております編集委員による「今年の抱負」を今月号に掲載しています。テーマが決められていないため、とても個性的な文章が並んでおり、それぞれの編集委員の個性が垣間見える、おもしろい中にも全体として通して読むと、学会としての未来や方向性が見える、そんな記事になっているのではないかと考えています。編集委員の方には、普段から月に1回の編集委員会への参加だけでなく、査読の担当委員、各連載の執筆や取りまとめ、解説特集や論文特集の企画や取りまとめと、さまざまな仕事をいただいております。そうした活動を通して、学会誌はどうあるべきか、どうい記事をつくれれば会員の方々に満足いただけるか、また人工知能研究を進めるには何が必要かなどを日々考えています。こうした記事からそれが少しでも伝わって、会員の皆様とのよりインタラクティブな誌面づくりができればと思っています。

といたしますのも、いろいろな組織で、情報のつくり手と受け手が一体になって進化していくことが求められているように思います。学会誌の編集にとって最も重要なのは読者の方の反応であり、潜在的な読者層のニーズであり、そこに人工知能という研究の進展をどのように載せていくかということだと思います。

いきなり卑近な例になりますが、先日、研究室で学生16人を連れてインドネシアに行ってきました。新興国の熱気と経済成長を知ると同時に、日本のコンテンツがどうアジアで消費されるのかを知るために、全員でJKT48のコンサートを見に行ってきました。JKT48というのは、AKB48のジャカルタ版で、ほかにも上海版のSNH48などもあり、ほとんどインドネシア人のメンバーで構成されています(日本人のメンバーも少しだけいます)。コンサートではちょうどMCの場面に入ったのですが、最初に驚いたのがその熱気と、インドネシア語が

全くわからないということでした(当たり前です)。歌の盛り上がり方もすごくて、言葉がわからないながら大変楽しめました。そして、2時間のコンサートが終わってもお客さんが誰も出て行かないので、どうしたのかなと思っていると、10分くらい経ってからやっと出口が開きます。そこには、先ほどまでステージで踊っていた48人のアイドル達がずらりと並んでいて、お客さんと一人一人ハイタッチをしていくのです。これには学生たちも大興奮で、「また来て下さいと言われちゃいました」と大変喜んでいました。まさに、AKB48のコンセプトである「手の届くアイドル」というのはこういうことなのかと感心すると同時に、言語が違ってもこういったフォーマットが世界各国でも通用することにとっても驚きました。このハイタッチは、これだけ人気絶頂の日本のAKB48でも今でも行っており、コンサート後のお客さんの反応を肌で感じながら、メンバー一人一人の公演へのモチベーションにしているのだと思います。

人工知能学会は、国内で人工知能に興味をもつ限られた人達の集団です。ただ、人工知能に興味をもつ人は世の中にたくさんいますし、学会誌の誌面づくりもこれまでのような、編集と読者というような2分法ではなく、読み手とつくり手が一体になって、時には立場を入れ換えながら、おもしろいコンテンツを創りだしていくことが重要だと思います。そのことが、より良い研究をしていくモチベーションになり、フィードバックを常に受けながら切磋琢磨することで、ますますコミュニティが発展することにつながればと思います。いつか、全国大会の発表後に、すばらしい発表をした講演者が、1000人くらいの聴衆をハイタッチで見送る、そんな光景もあっても良いのでは、と思ったりもします。

そういう意味で、人工知能学会の誇る大変個性的な48人(ではないですが)の編集委員の今年の抱負を、ぜひお楽しみください。